

説 林

魏の東方經略と扶餘城の問題

——高句麗に關する二征戰——

和田 清

一

同じ東亞の北邊ではあるが、滿洲・蒙古の地方は所謂乾燥アジアの東縁に當つてゐて、東へ寄れば寄るほど、濕度も多く土地も肥えてゐて、自然的恩恵に富んでゐた。然るに之を歴史的に見ると、その西方地域は早くから西方文化の影響を受けて開けてゐたのに反して、東方地域はその影響を蒙ることも尠く、文化の開発に頗る遅れてゐた。換言すれば、西蒙古は割合早く開けてゐたが、東蒙古の開発は遅れ、殊に極東の滿鮮地方は全く世界の片田舎で最も遅れてゐた。支那と地續きの農耕地帯である滿鮮地方が漸く開け始めたのは、専ら漢民族漢文化の發展の結果である。

だから西紀前の歴史である史記や漢書にも、既に匈奴傳があつて西北邊外のことを案外詳敘してゐるだけでなく、西方のことなら遠く中亞からインド・イラン・イラク方面のことまで傳へてゐるのに反して、東方のことは隣接の滿洲・朝鮮のことも殆ど記してゐない。尤も戰國の時燕の昭王が遼東を經營し、漢の武帝が朝鮮を伐つたことがあるから、その事だけは史記の匈奴傳や朝鮮傳に見え、漢書にも殆どそのまま轉載してあるが、その滿洲も朝鮮も今の遼河の下流域と西北朝鮮の一角だけのことであつて、その他奥地のことは一切何事にも觸れてゐない。思ふに、先秦の頃から滿洲に肅慎・玁狁などいふ部族が居り、前漢の頃には北滿に夫餘といふ國が起り、後漢に及んでは南滿に高句麗といふ強國が勃興したぐらゐのことは、漢人と雖も知らなかつたのではなく、その知つてゐた證據も認められるが、しかし中華の歴史家はあまりこれらの未開部族については、深い興味を持たなかつたのである。

かくして所謂東夷諸國のことが中原史家の注意に上つたの

は、西紀三世紀の三國の魏の時が始めてであつて、最初に魏の歴史家魚豢の魏略に採録され、次ぎに晋の陳壽の三國志に轉載せられ、更に後に宋の范曄の後漢書にも殆どそのまま移録された。その結果として東夷諸國の上代史が漸く明かになるのである。それではどうして三國の魏の時になつて、始めて東夷のことに特別注意をしたかといふと、それは全くこの時高句麗の勢が猖獗を極めたので、魏が大軍を出して之を征討した爲めに相違ない。所謂「魏の東方經略」はかくして極東古代史上に於ける最も重要な一事件となるのである。さうしてその始末は今日に傳はる三國志魏志の東夷傳や母丘儉傳等にほぼ備つてゐるのであるが、その解釋に頗る異論があるので、こゝに一文を草する必要を生じたのである。

二

魏の高句麗征伐の始末は、普通の解釋ではたゞ之を魏志の文面通りに取つて、大體左の如く考へてゐる。

景初二年(238 A. D.)遼東の公孫氏を滅ぼした魏は、そ

の征戰に功のあつた母丘儉を幽州刺史として、この地方を管治させた。母丘儉は有爲の長官であつたから、東隣の異族高句麗の侵犯を惡み、正始五年(244 A. D.)軍を出して之を伐ち、その都城即ち今の輯安縣の丸都城を屠つて還つた。しかし高句麗の勢力は俄に壊滅しなかつたので、翌六年再び自ら將として敵の都城を襲ひ、逃ぐる高句麗王を追つて南沃沮の地まで蹂躪した。南沃沮の中心は恐らく今の咸興の附近であらう。高句麗王は更に遁走して北沃沮即ち今の豆滿江流域まで竄れたので、母丘儉は配下の玄菟の太守王頎をして之を窮追せしめた。命を奉じた王頎は南北沃沮の地を縦斷して、肅慎氏の南界の海濱まで達したといふ。沃沮は高句麗の屬部であつて、肅慎氏とはその北隣の挹婁のことであるから、王頎の達した海濱は恐らく今の豆滿江口の邊であつたであらう。

魏志によると、この同じ正始六年に、樂浪の太守劉茂と帶方の太守弓遵も力を協せて、嶺東の濊即ち今の江原道

方面の土人を、高句麗の與黨なりとして討伐してゐるから、これも長官幽州刺史母丘儉の節度に從つたのであらう。なほこの時玄菟の太守王頎は北滿の夫餘をも招撫してゐるが、これも同じ運動の一つでなければならぬ。

かういふのが魏志の本文を素直に解釋する從來の通説である。然るに銳利剃刀の如き池内宏博士はかゝる解釋を迂腐なりとして之を斥け、「さうではなく、少くとも後の正始六年の討伐は専ら玄菟の太守王頎一人の主導下にあり、王頎は自ら高句麗王を追逐すると共に、樂浪の太守劉茂及び帶方の太守弓遵に命じて相呼應して嶺東の濊を伐たしめ、更に自ら進んで東滿の山地を跋涉して、挹婁より夫餘に出で、還つたのだ」と主張せられた。昭和五年八月に出た滿鮮地理歴史研究報告第十二所載の雄篇「曹魏の東方經略」は即ちこの論旨を堂々と主張せられたものに外ならぬ。さうしてこの主張に伴つて、從來の沃沮や夫餘に對する解釋も頗る變更せられたのである。

池内博士は人も知る滿鮮史の老大家である。殊にその行論

は精緻嚴密を以て鳴つてゐる。だからこの論文でも、從來の舊説を打ち固められたところは誠に周到綿密で、名人の至藝ともいふべく、何人も心服せざるを得ない。たゞその新説の部分は餘りに無理が多く、他と衝突して到底承服し難い。實は右の論文も發表の當時から専門家の間には異論が多かつたのであつて、自分は固より博士及門の弟子ながらやはり俄に首肯出來なかつた。されば機を見て博士に反省を促したことも一再でなかつたが、自信の強い博士は他人の議論に耳を貸さず、後には之を英文にして東洋文庫紀要にまで發表された。人の意見は様々であるから、あながちに強ひ難いと思つて、その後は之に觸れずに來た。ところがこの頃になると、滿洲史專攻の大家は段々に亡くなり、専門外の人とは博士の大名に壓せられて、その説に従ふものが尠くない。それより困つたことは、今度さる事情から既刊の「滿洲歴史地理」を改訂することになつたので、この謬説を正さずに置いては後の議論の進めやうがない。そこで明らかに恩師の學説を非議することになつて、誠に心苦しいが、學界のため已むを得

すこゝに一文を草し、併せて扶餘城の問題にまで及んだ次第である。

三

率直にいふと、池内博士の誤解の原因は固より學術研究に眞摯にして新説を出さんとする熱意の餘りに出たことは言ふまでもないが、直接には左に引く魏志^{卷三}東夷傳東沃沮の條の本文を読み誤られた爲めである。東沃沮傳には母丘儉の第二回即ち正始六年の高句麗討伐のことを説いて、

母丘儉討句麗、句麗王宮奔沃沮、遂進師擊之、沃沮邑落皆破之、斬獲首虜三千餘級、宮奔北沃沮。

といひ、その後北沃沮のことを説明し、更に續けて王頎の發遣せられたことを述べ、

王頎別遣追討官、盡其東界。

といひ、その東界の果てで王頎がその地方の傳説を訊問したことを述べてゐる。句麗とは勿論高句麗の略稱で、宮とは時の高句麗王即ち東川王の諱名である。

この時初めはやはり母丘儉が自ら將として征伐に従つてゐたことは、右の文の外に、魏志^{卷二}の母丘儉傳にも左の如くあつて疑ない。

六年復征之、宮遂奔賈溝^(北沃沮のこと)、儉遣玄菟太守王頎追之、過沃沮千有餘里、至肅慎氏南界、刻石紀功、刊丸都之山、銘不耐之城、諸所誅納八千餘口。

全征伐で誅納するところ八千餘口といふのに、南沃沮を蹂躪したゞけで斬獲首虜三千餘級といふのであるから、咸興方面の蹂躪が如何に激しかつたかはそれでも解らう。さうしてそれは皆母丘儉自身のやつたことなのである。

然るに池内博士はどうしてかこの第二回の征伐は専ら王頎が行つたものと考へられた⁽¹⁾。随つて右に掲げた沃沮傳の文の「王頎別遣追討官」の官を官の譌と見做し、「王頎別に遣はされて宮を追討す」と讀むべきを、却つて「王頎別に追討官を遣はす」と讀まれた⁽²⁾。これが誤解の出發點である。既に「追討官を遣はす」といふ以上、その追討官は誰かといふことになり、紆餘考究の結果、それこそかの樂浪の太守劉茂と帶方の

太守弓邈だとされた。⁽³⁾

しかしそれは果してどうであらうか。幽州の刺史母丘儉は正しく直屬長官であるから、その配下の玄菟⁽⁴⁾・樂浪⁽⁵⁾・帶方⁽⁶⁾三郡の太守をそれ／＼適當な地方に發遣出來たのであるが、玄菟の太守王頎は樂浪の太守劉茂や帶方の太守弓邈とは全く平等の同輩である。否、同じ魏志の韓傳及び倭人傳によると、その後帶方の太守弓邈は韓族の亂によつて陣歿したので、この征伐の二年後なる正始八年には、玄菟の太守王頎が代つてその後任に就いた由さへ見えてゐる。⁽⁵⁾王頎は武勳赫赫たる名太守であつたから、これは別に左遷ではなく、寧ろ榮轉したのではないかとさへ思はれるのに、玄菟の太守から帶方の太守に遷つてゐるのである。三郡の太守の關係は實際かやうなものであつた。それをどうして、玄菟の太守が他の二郡の太守を指揮發遣することが出來ようか。況して高句麗王宮の名は前後に繰返して出て來てゐて毫末の疑もない。それを強ひて官の譌なりとして、「追討官」を「追討官」なりといふ。追討官などいふ官名が當時果してあつたであらうか。

樂浪の太守劉茂と帶方の太守弓邈とは各々上司母丘儉の命を受けて、所定の地方を平定したので、それと相應じて玄菟の太守王頎もまた上命を奉じて高句麗王宮を追ひ、沃沮の地を席捲したのである。それはさう明記してあるから間違ひやうのないことで、官の行先をこそ見失つて、捕へることは出來なかつたが、かくして東沃沮の東北界を盡したのである。然るに池内博士は追討官の極めしめられた東界は一見挹婁の東界のやうであるが、それでは不都合だから、恐らく沃沮の東界なのであつて、實に劉茂・弓邈の平げた地方の東界に外ならず、今の江原道の南端蔚珍邑のあたりでも指したのであらうかといふやうにいはれた。⁽⁶⁾しかし劉茂・弓邈の經略したのは明かに江原道の畿の住地であつて、咸鏡道の沃沮ではない。なほ博士はこの所で東沃沮の語に關説し、「魏志の沃沮傳の主題として全沃沮の總名の如くなつてゐる東沃沮は、其の實南北沃沮中の南沃沮を別にかう稱したものでなければならぬのであるから、南沃沮の南の地方が其東界と呼ばれてゐても、別段怪しむに足らぬ」といつてゐられるが、さうして

後にも南沃沮だけが東沃沮なことを繰返して主張して居られるが、魏志の東夷傳を精讀して見ると、沃沮は東方にあるから俗に東沃沮といつたので、南北沃沮はその中の小區分に過ぎぬ。決して南沃沮だけが東沃沮なのではない。その證據には東沃沮の境界を説いて、「北は挹婁夫餘と接す」とあるので明白である。いづれにしても沃沮の地の南界は博士も認めてゐられる如く、今の咸興の南、定平の邊であるから、江原道の蔚珍邑とは大變に距つて居り、劉茂・弓遵は濊の地を平げたのであつて、決して沃沮の東界には至つてゐない。

魏志の沃沮傳には、上掲の「盡其東界」の語に續けて左の如くある。

問其耆老、「海東復有人不」。耆老言、「國人嘗乘船捕魚、遭風見吹數十日、東得一島、上有人、言語不相曉、其俗常以七月取童女沈海。」又言「有一國、亦在海中、純女無男」。又説、「得一布衣、從海中浮出、其身如中國人衣、其兩袖長三丈。又得一破船、隨波出在海岸邊、有一人、項中復有面、生得之、與語不相通、不食而死」。其域皆

在沃沮東大海中。

池内博士はこの説話の中、第一話だけを重視し、その島を江原道の海中にある鬱陵島のことではないかと言つてゐられるが、これは海上數十日もかゝるところで、そんな近い實在の島ではない。女護ヶ島や手長島や二面國と並べられた話ぶりから見ても、當時の知られたる地域の極邊に來たから、かやうなお伽話を聞かされたのであつて、それは確に北沃沮の北端の話である。文中にも明かに「其域皆在沃沮東大海中」とあつて、決して江原道のやうな濊地の話ではない。なほ後漢書の東夷傳東沃沮の條末には、右の説話の第一話を省き、その代りに、最後に「或傳其國有神井、闕之、輒生子云」といふ別の話をつけ加へてゐる。これは魏志以外のものにはさういふ所傳もあつたことを示し、池内博士の如く、第一話だけを重視することを許さぬのである。

四

しかし、以上は寧ろ言葉尻を捉へた揚足取り見たいなこと

で、事實に於いては大した相違もないのであるが、次ぎに博士の大いなる誤解は、この時北沃沮に入つた王順の軍がそのまゝ引返さず、更に進んで肅慎氏の國なる挹婁の地域内を通過し、滿洲の奥地を大廻りして、西に轉じて夫餘の國を経て還つたと考へられたことである。蓋し王順が南北沃沮を席卷したのは正始六年中のことであつて、その年もしくは少くとも翌七年中には王順がまた夫餘を招撫した事が夫餘傳中に語られてゐるから、博士はこれを二つの別事とは見ず、寧ろ引續いた一連の行動と考へられたのである。それには博士も明記してゐられる如く、後年の遼の聖宗の滿洲經略に頗る類似の事實があつて、その時には遼將奚和朔奴・蕭恒德等が滿洲の西北から東南に出で、鐵利から兀惹を経て、高麗の北鄙を掠めて歸還したことがあるから、さうしてその事は博士が始めて闡明せられた新史實であるから、博士は明かにそれを聯想して、王順の率ゐた魏の軍勢は丁度その逆を行き、滿洲の東南から西北に出て、沃沮から挹婁・夫餘を経て歸國したものと推定せられたのである。

これこそ博士の創説であつて、この構想を得られたが爲めに、博士の雄篇は起草せられたものと思はれるが、しかしそれには全く根據がない。博士の信念によれば、魏志の挹婁傳の記述は頗る詳確であるが、それは必ず魏軍がそこを通過實見したからでなければならぬといふ。けれどもそれは必ずしもさうとは限るまい。魏の使が往つて見聞して來ても、挹婁の貢使が來て自ら詳述して行つても、この程度精確な記述は得られる筈である。博士によれば、夫餘の本據は今の哈爾濱の東南の阿城の附近であり、挹婁の本據は牡丹江上の寧安方面であるといふ。果して然らば、沃沮から北上した魏の軍勢は挹婁から正しく西北して夫餘に出たのである。然るに魏志の挹婁傳によれば、明白に「挹婁在夫餘東北千餘里」とある。これは果してどういふことであらうか。寧安から阿城に出た魏軍は、寧安を阿城の東北に在りと考へたのであらうか。なほおかしいことは、王順の遠征を傳へた魏志の東沃沮傳でも、毋丘儉傳でも、上掲のやうに沃沮の北邊まで行つたことは書いてあるが、それ以上の事の決して書いてないことであ

る。なる程そこから引返したとは明記していないが、挹婁や夫餘へ廻つたらしい氣配は假りにも泄らしてないではないか。若し果して空前の奥滿洲大行軍が行はれたのなら、その事を全然書き漏らす筈は先づあるまいではないか。

否、これらの議論は抑も末である。健全なる常識から考へて見て、當時の魏軍に滿洲の奥地縱斷など出来る筈がないのである。試に思へ、大軍の行動に當つて、後方輸送・糧餉補給の問題が如何に重大であるかは、苟くも戰史を一閱したほどの者なら、誰でも知つてゐるところでなければならぬ。だから古の良將は成るべく糧に頼るの方策を採つた。しかし敵の糧に頼るのには自ら制限があつて、敵地が不毛の蠻地などではどうにも仕やうがない。されば漢唐明清の兵が沙漠を征するや、豫め萬全の用意をして前年から糧餉を邊境に積み、正軍に劣らない數の人夫と牛馬車輛とを備へて、後方輸送に努めたものである。かうしてこそ始めて漠北の遠征が可能であつた。然るに今魏の軍勢は遠く高句麗王都を陥れ、遁ぐる王を窮追して咸鏡道を縱斷したのでさへ既に駭くべき

に、それから想ひついて更に數千里の大行進を行ひ、高句麗とは直接關係もない滿洲無人の山地を跋涉したとは到底考へ得ないではないか。左様なことをすれば、魏軍は敵に逢はなくても、皆困乏して斃れてしまつた筈である。

當時の挹婁のことは魏志の本文に左の如く、

挹婁在夫餘東北千餘里、濱大海、南與北沃沮接、未知其北所極。其土地多山險。其人形似夫餘、言語不與夫餘・句麗同。有五穀牛馬麻布。人多勇力、無大君長、邑落各有大人。處山林之間、常穴居、大家深九梯、以多爲好。土氣寒、劇於夫餘。其俗好養豬、食其肉、衣其皮、各以豬膏塗身、厚數分、以禦風寒、夏則裸袒、以尺布隱其前後、以蔽形體。其人不潔、作溷在中央、人圍其表居。其弓長四尺、力如弩、矢用楛、長尺八寸、青石爲鏃、古之肅慎氏之國也。善射、射人皆入、因矢施毒、人中皆死。出赤玉・好貂、今所謂挹婁貂是也。自漢已來、臣屬夫餘、夫餘責其租賦重、以黃初中叛之、夫餘數伐之、其人衆雖少、所在山險、鄰國人畏其弓矢、卒不能服也。其國乘船寇盜、

鄰國患之。東夷飲食、類皆用俎豆、唯挹婁不法、俗最無綱紀也。

とあつて、穴居して便所をその中に囲み、まだ石器時代の遺風があつて楷矢石弩を用ひ、その他最も野蠻であつたのである。滿洲の奥地は最近まで森林に蔽はれたところであつた。

況して千數百年の昔、その土地は山險で、人衆は少く、しかも慄慄だつたといふ。道路らしい道路など無かつたことは言ふまでもない。魏軍はどうして左様なところを通過出来たであらうか。或はその後數百年、契丹の軍は殆ど同じ道を通過したではないかといふかも知れぬ。しかし當時は渤海國繁盛の後を承けて、滿洲の奥地は最も開けてゐた時代である。道路も食料も案外あつたかも知れぬ。況して契丹の鐵騎は漢の軍より困苦窮乏に慣れてゐた筈である。その契丹兵が成功したからといつて、八百年前、魏の軍も亦同様に成功したらうとは、考へる者の不覺である。否、その契丹の兵すら實は成功しなかつたのであつて、この征戰の始末を記した遼史(卷八)の蕭恒德傳には、「比還、道遠糧絕、士馬死傷甚衆、坐是、

削功臣號」とあり、同卷八奚和朔奴傳には「以地遠糧絕、士馬死傷、詔降封爵」と見えてゐる。これによつて之を觀れば、美事に成功し凱還して褒賞せられた王顧等の軍は、決して左様な無謀な遠征はしなかつたのである。

池内博士が魏の軍を沃沮から夫餘へ廻つたとせられたのは、一には魏志の夫餘傳の中に、

正始中、幽州刺史毋丘儉討句麗、遣玄菟太守王願詣夫餘、
位居(夫餘の執政者)道大加(名)郊迎、供車糧。

とあるによつて考へつかれたのであるが、これは必ずしもさう解釋しないでもよい。玄菟の太守は東北面の夷族統御の責任者であつたから、先きの征戰とは別に南方から夫餘に行つて、之を招撫したのだと見れば何でもない。池内博士によれば、夫餘の本據は今の哈爾濱の東阿城の附近であるから、東滿から廻りたくもなるのであるが、實は夫餘はそんな所ではなく、もつと西南方、魏の邊境に近くゐたのである。以下夫餘の本據について考へて見よう。

五

夫餘は先述の如く滿洲に最初に出來たやゝ國家らしい國家である。漢民族の文化が發展して遼河の下流域まで及ぶと、滿洲の部族は皆その感化を受けて開明に赴いた。その中、遼河の下流域に連る北方の沃野は滿洲最良の農耕地帯であつたので、そこに先づ漢文化が影響して夫餘國が起つた。その南方の遼東の山地は一時漢の玄菟郡の治下にあつたに係らず、山間の瘠土で急には進まなかつたが、やがてその地に高句麗が起り、夫餘に代つて富強に赴いた。後の渤海はこの高句麗の餘類の建てた國である。なほ夫餘のことは後には扶餘と書き、高句麗は後に高麗とも略稱された。とも角夫餘は滿洲最古の國家として起り、繁榮もまた永かつたので、その名は後々までも残り、殊にその中心地と思はれる扶餘城・扶餘府の名は高句麗にも渤海にも聞えてゐた。就中有名なのは渤海の扶餘府である。扶餘府は渤海の十五府の一で、渤海より契丹に至る交通路上の要衝を占めてゐた。遼史太祖本紀による

と、太祖は晩年に渤海を滅ぼさんとして、天顯元年(982)先づこの扶餘府を取り、進んで渤海の國都忽汗城即ち上京龍泉府を陥れたが、歸途にまた扶餘府に駐し、病を獲てそこに崩じた。時に黃龍が城上に現れたので、名を更めて黃龍府と曰つたといふ。なほ同書の地理志等によると、黃龍府はその後景宗の保寧七年(985)に至り、鎮將燕頗の叛亂により一時廢止せられたが、更に後に聖宗の開泰九年(1029)に再び東北の地に移置せられ、もとの黃龍府の地は通州と稱せられたといふことである。

さてこの黃龍府が果して今の何地に當るべきかは久しく疑問であつて、清代の史家は多く之を開原附近の地に比定してゐたが、先年我が松井等學士は詳に考へて、遼の龍州黃龍府は即ち金の隆州隆安府であつて、その隆安の轉訛が農安であるから、乃ち今の長春の西北伊通河畔の農安こそ黃龍府の遺址であると論證された⁽⁸⁾。農安はこの方面の要衝であつて、今も當時の古塔があり、これは全く動かし難い鐵案である。これより以來遼の黃龍府が今の農安なることは勿論、渤海の扶

餘府も恐らくその近傍で、随つて漢魏時代の夫餘國の中心も必ずやこの地方であらうと考へられて來た。これは殆ど一般に採用された通説といふべきである。

然るに創見に富む池内博士はこれにも疑を挾まれて、渤海の扶餘府の址は今の農安に相違無からうが、漢魏時代の夫餘國は五世紀の末に勿吉に滅ばされて、唐の初に渤海國が起るまでには、その間に約二世紀を隔てゝゐるから、たとへ唐書渤海傳に「扶餘故地爲扶餘府」とあつても、それは到底あてにならない。今の農安方面は東方の滿洲民族と西方の蒙古民族との境界上に位し、その分争地であるから、そこが滿洲民族なる夫餘の中心地たる筈がないと論じ、夫餘の本地としてはあらゆる條件を考慮に入れて、後の金の發祥地たる阿城近傍に擬するに如くはないと考定された。昭和七年六月滿鮮地理歴史研究報告第十三に載せられた「夫餘考」がそれである。尤も「夫餘考」には夫餘の名の初見からその滅亡に至るまでの事實を綿密周到に論盡してゐるのであるが、その特見は實にこゝにあつて、博士の前後の論考が多くこの考定に基づいて

進められてゐることは、前述の「魏の東方經略」でも一例を見え通りである。

しかしその説には肯き難い點が多々あつたから、自分も初めより賛成出来なかつたが、近頃九州大學の日野開三郎教授は特に「夫餘國考」といふ大作を著して、池内博士の阿城説を否定し、もとの農安説を支持せられた。⁽¹⁰⁾ 日野教授の論陣は詳細を極め、十二分に阿城説の弱點を論破して餘蘊がないから、今更別につけ加へるところもない。しかしたゞ、二三、日野氏の言はれなかつたやうなことだけいへば、先づ第一に、夫餘は漢文化の影響を受けて最初に起つた國であるから、それが阿城のやうな遠方にあつては不都合なのである。阿城のやうな遠い所まで開けるくらゐなら、その前に沃野つゞきの近い所に別に起る地域がなければならないからである。魏志の東夷傳によると、夫餘は「於東夷之域最平敞」とあり、これは誰でも一番注意する語句であるが、さうして池内博士は今の阿什河の流域が最も能くその形勢に合ふといはれるが、阿什河流域の地は誰も知る通り哈爾濱方面の太平洋から一丘

陵を隔てた先方の溪谷であつて、水質の悪い卑濕な地である。決して「於東夷之域最平敞」とはいへぬ。博士は別に「勿吉考」に於いて、勿吉の本據をやはり阿什河流域とし、そこに「其地下濕」もしくは「地卑濕、築土如堤」などあるのを最も適切としてゐられるが、⁽¹¹⁾下濕と高敞とはあべこべの概念であつて、一方に叶へば他方に適はない筈である。東夷の域に於いて最も平敞なのは、農安方面に若くはない。

なほ漢書^{卷一}の王莽傳によると、高句麗勃興の當初、漢が之に壓迫を加へると、高句麗が畔き、夫餘が動搖するだらうといふことを述べて、「恐其遂畔、夫餘之屬、必有和者、云々」と見えてゐるが、當時の高句麗はまだ佟家江畔に蟄居してゐた。それが畔くと附和するといふ夫餘は餘り遠方の部族ではなかつたやうである。少くとも魏志の夫餘傳には、遼東の公孫度がその宗女を夫餘に與へたことを記して、「時句麗・鮮卑

疆、度以夫餘在二虜之間、妻以宗女」とある。この時の高句麗もまだそれ程北方に發展してゐなかつた筈であるから、若し夫餘が北方の阿城の方面にでもあれば、之を句麗・鮮卑二

虜の間に在りといふことは困難ではなからうか。高句麗が全盛時には北方はどの邊まで延びたらうか。それは今後の研究に期待すべき未決の問題であるが、今日知られたる限りでは、高句麗風の山城は北は吉林の龍潭山々城を以て極限としてゐる。どうして天然の障礙もないに、吉林より北に延びなかつたか解らないが、或はそれより北方はまだ開けてゐなかつたからでは無からうか。いづれにしても、高句麗の北界はその邊と思はれるのに、今賈耽の古今郡國志の逸文によれば、⁽¹²⁾「渤海國南海・鴨渌・扶餘・柵城四府、並是高句麗舊地也」とあり、扶餘府は高句麗の盛時その領内に入つてゐたのである。この場合南海府は咸興、鴨綠府は輯安、柵城府は琿春で、いづれも確に高句麗の舊地であるから、扶餘府のことも嘘ではあるまい。果してさうとすれば、扶餘は決して阿城などではあり得ない。

池内博士は夫餘の地が東西兩勢力の分争地にあつてはおかしいといはれ、それが博士立論の出發點になつてゐるのであるが、見方によつては、東方の森林と西方の草地との境目の

農耕地帯、その所謂分争地にこそ一勢力が起り得るのであつて、それは明末の葉赫や哈達の實例を見ても思半に過ぎるであらう。なほ博士は漢魏時代の夫餘は亡びて後久しく、渤海の扶餘府とは間がきれてゐるといはれるが、扶餘城の名は夫餘に代つた高句麗の中に引續いて存してゐて、その間がきれたとは必ずしも言へないのである。その高句麗の扶餘城の位置さへ解れば、渤海の扶餘府のことも自ら明瞭になり、前代の夫餘國のことも或る程度闡明せられる望があるであらう。以下その心算で高句麗の扶餘城のことを少しばかり考へて見よう。

六

高句麗の扶餘城のことは唐の高句麗征伐の際に最も能く現はれて来る。さうしてこれも亦池内博士の精細なる検討を経たものであるが、不幸にしてその結論にはやはり異議を免れない。新舊唐書・冊府元龜・資治通鑑等によると、從來數次高句麗と戦つて効果を擧げ得なかつた唐は、高宗の乾封元年

(666) 高句麗の内訌に乗じてその討滅の大兵を出した。高句麗の内訌とはこの時權勢並びなかりし大莫離支泉蓋蘇文が死んで、その長男泉男生と次男男建・三男男産との間に争を生じ、高句麗の實權は兩弟男建・男産の握るところとなり、男生は走つて舊都國內城に據り、唐に通じて救を求めたことである。國內城は即ち元の丸都城で、今の鴨綠江中流の輯安である。唐は乃ち將軍龐同善・高侃等を遣はして先づ之を迎接せしめたが、その年十二月更めて英國公李勣に命じて遼東道行軍大總管とし、契苾何力・龐同善・高侃・薛仁貴・李謹行等諸將を率ゐて進撃せしめた。大軍は進んで遼河を渡り、翌二年九月新城を陥れた。新城は今の撫順縣北の北關山城であつて、國內城方面にたて籠つた泉男生の勢力圈内に入る門口である。そこで唐將は手を分つて附近の諸城を陥れ、遂に進んで鴨綠江畔に集結した。この戦争は歲餘に亘つて戦はれたが、その始末は詳でない。これより前、貞觀十九年(645)に(13)の役は太宗の親征であつたから、その征戰の始末も割合詳細に傳へられたが、今度は何もかも一向に明かでない。そ

の中では資治通鑑^{卷二}に傳ふところが凡てを集約して最も要領を得てゐるから、左に之を引く。唐人の所謂高麗は我等のいふところの高句麗である。曰く、

〔乾封二年(638)〕九月辛未、李勣拔高麗之新城、使契苾何力守之。勣初度遼、謂諸將曰、「新城高麗西邊要害、不先得之、餘城未易取也、」遂攻之。城人師夫仇等縛城主、開門降。勣引兵進擊一十六城、皆下之。龐同喜、高侃尙在新城、泉男建遣兵襲其營、右武衛將軍薛仁貴擊破之。侃進至金山、與高麗戰、不利、高麗乘勝逐北、仁貴引兵橫擊大破之、斬首五萬餘級。拔南蘇・木底・蒼巖三城、與泉男生合。

總章元年(即ち乾封三年 638)二月壬午、李勣等拔高麗扶餘城。薛仁貴既破高麗於金山、乘勝將三千人、將攻扶餘城、諸將以其兵少止之。仁貴曰、「兵不在多、顧用之何如耳、」遂爲前鋒以進、與高麗戰、大破之、殺獲萬餘人、遂拔扶餘城。扶餘川中四十餘城、皆望風請服。……泉男建復遣兵五萬人、救扶餘城、與李勣等遇於薛賀水、合戰

大破之、斬獲三萬餘人。進攻大行城拔之。……勣既克大行城、諸軍出它道者、皆與勣會、進至鴨綠橋。

扶餘城の名はこゝに初めて出て来る。否、右の文を熟讀すると、殺獲の數などから見ても、金山・扶餘城・薛賀水一連の戦のみが壓倒的大戰なのであつて、扶餘城の攻陷こそ實に高句麗の運命を決したものだといへる。それではその扶餘城は果して何處であつたか。この問題を始めて稍と詳に考へたのは故松井等學士であつたが、松井氏はこの扶餘城をもやはり農安と考へ、金山はその手前にあつたからといふので、「遼東志」^{卷一}に開原の西北三百五十乃至四百里の邊にて遼河の北に近く曲呂金山東金山及西金山と云ふ三つの山ありと云ふ。これ恐らくは唐代の金山なるべし」と論ぜられた。⁽¹⁶⁾之に對して最初に疑を挿まれたのは津田左右吉博士である。しかし津田博士の説を紹介するためには、豫め南蘇・木底・蒼巖三城の位置を決定して置かねばならぬ。これら三城のことは從來の舊説は姑く措いても、故箭内互博士以來多くの専門學者の検討を経たが、結局今では三城は蘇子河から渾河にかけた街

道上に相連なり、南蘇は薩爾澗、木底は木奇、蒼巖は興京老城の邊ではないかといふことになつてゐる。⁽¹⁶⁾

さて津田博士は、新城は今の撫順の附近で、南蘇・木底諸城は蘇子河流域方面であるのに、唐軍は新城を抜き、金山で戰つて、南蘇・木底諸城を陥れたのであるから、金山は必ずその中間で、撫順の東方、渾河々畔の一點に相違なく、扶餘城は更にその南蘇・木底・蒼巖諸城を抜いてから行つたところであるから、更にその前方で、恐らくは佟家江の下流域にあるべく、かやうな所を扶餘城と呼んだのは、「佟佳江は古の卒本川にして、其の河畔に置かれし高句麗最古の都邑に關して卒本扶餘といふ名稱さへも傳はりをれば、其の沿岸の主要なる城寨に傳説的なる扶餘の名を命じたらんこと由なきにあらざるべく、或は最後の夫餘王の高句麗に來降せしものあれば、之を「安置せし城寨あり、之を扶餘城と呼びならはしたり」とも考へらるといふやうに説明され、「何れにもせよ、この扶餘城が扶餘の故國たる今の農安方面なりとは考へ難し。もし、しか考ふれば、上に引用せし戰役の記事は盡く

地理上の實際と矛盾すればなり。云々」と結ばれた。⁽¹⁷⁾

池内博士はなほこの説にも満足せず、専ら新舊唐書の薛仁貴傳によつて、扶餘城攻陥の勇將薛仁貴は、南蘇・木底・蒼巖諸城を抜き、一旦國內城に入つた後、更に進んで扶餘城を陥れ、海に並うて地を略して李勣の軍に合したといふのであるから、扶餘城は國內城より更に前方で海に沿うた所でないならば、それは必ず今の咸鏡南道の首府咸興であつて、薛仁貴は禿魯江・長津江に沿うて黃草嶺を越え、咸興で扶餘城を屠つて、そより元山平壤街道に由つて平壤の李勣の本軍に會したものと解せられた。⁽¹⁸⁾ 蓋し撫順より渾河を溯つて蘇子河の源流を極め、分水嶺を越えて佟家江の支流富爾江畔に出で、流に沿うて下つて佟家江を渡り、更に新開河を溯つて輯安に出づるの道は、撫順・輯安間第一の大道であつて、昔は魏の毋丘儉等もこの道を過ぎたところであり、また輯安より鴨綠江を渡つて江界に出で、禿魯江の源流を極め、牙得嶺もしくは薛寒嶺を越え、舊長津に至り、長津江に沿うて南に溯り、黃草嶺を過ぎて日本海岸の咸興に達する道は、この方

面隨一の孔道であつて、毋丘儉・王頎の昔より絶えず利用せられたところであるからである。

けれども考へて見るに、同じ高句麗の扶餘城がそんなに方
 方にあつて、果してよいものであらうか。少くとも、池内博
 士の考定は餘りに遠くに持つて廻り過ぎたやうである。遼東
 から平壤に赴く唐軍が國內城へ廻つたさへあるに、更に脊梁
 山脈を越えて東朝鮮の咸興に出で、東方から平壤に薄つたと
 いふ。さういふ大迂回運動の必要がどうしてあつたであらう
 か。博士によれば、この一軍は薛仁貴の手勢だけであつたと
 いふが、さういふ孤軍の敵中横斷は果して危険を伴はなかつ
 たであらうか。俄に肯ひ難いところである。なる程兩唐書の
 薛仁貴傳には、確に唐軍が國內城方面と連絡をつけた記事の
 後に、扶餘城攻陷のことが記してあり、なほ新唐書^{卷一〇}の契
 苾何力傳によれば、朝鮮方面の辱夷・大行二城を抜いた後に
 さへ「進拔扶餘」とも出て來るのであるが、これは偶々敘述
 が混亂してゐるだけのことであつて、扶餘城の攻陷はそんな
 後でもなければ、そんな遠くのことでもないやうである。

それは前掲の通鑑の記事にも能く現はれてゐる。即ち一薛
 仁貴既破高麗於金山、乘勝將三千人、將攻扶餘城、云々」と
 ある一條で、その事は兩唐書の薛仁貴傳にも同様に見え、猛
 將薛仁貴は金山の大捷の後、勢に乗じて直に扶餘城に迫つた
 ので、金山と扶餘城とは極めて近いところなのである。しか
 もその金山は津田博士も池内博士も、新城と南蘇・木底・蒼
 巖三城との中間の地でなければならぬから、恐らく今の撫
 順の東方、渾河河畔の一地點であらうと推してゐられる。果
 してさうとすれば、扶餘城もやはりあまりそこを遠く離れな
 い近傍でなければならぬ筈である。否、實は金山を撫順の
 東方と考へることそのことが既に間違なのであつて、新城即
 ち撫順を取つた後、金山で戦ひ、進んで渾河畔の南蘇・木底・
 蒼巖三城を抜いたとて、金山を乃ち兩者の中間と考へる必要
 は毛頭ない。當時の情勢を察するに、唐軍は高句麗西部の要
 衝新城即ち撫順を取つた後、執拗に追ひ縋る高句麗の大軍を
 四周に擊破して、勢に乗じて南蘇以下三城を抜いたのであ
 る。だからその戰場の一なる金山は必ずしも撫順の東方でな

くともよい。しかしその金山・扶餘城の位置を決定するためには、も少し圖將薛仁貴の行先を究明して置く必要がある。

七

池内博士は専ら兩唐書の薛仁貴傳によつて、仁貴等は南蘇・木底・蒼巖三城を抜いて先づ國内城に至り、そこより仁貴は獨り一面に當り、單獨行動で禿魯江を溯り、脊梁山脈を越えて咸興の扶餘城に出で、東方より平壤に迫つたものと解釋せられた。果してさうとのみ解すべきであらうか。問題の薛仁貴傳の必要な箇所は左の如くである。

乾封初、高麗泉男生内附、遣將軍龐同喜・高偏、往慰納。弟男建率國人、拒弗納。乃詔仁貴、率師援送。同善至新城、夜爲虜襲、仁貴擊之、斬數百級。同善進次金山、虜不敢前、高麗乘勝進、仁貴擊虜、斷爲二、衆即潰、斬馘五千。援南蘇・木底・蒼巖三城、遂會男生軍。手詔勞勉。仁貴負銳、提卒二千、進攻扶餘城、諸將以兵寡勸止、仁貴曰、「在善用、不在衆、」身帥士、遇賊輒破、殺萬

餘人、拔其城。因旁海略地、與李勣軍合。扶餘既降、它四十城、相率送款、咸震遼海。

新唐書一二
薛仁貴傳

詔仁貴統兵爲後援。同善等至新城、夜爲賊所襲、仁貴領驍勇赴救、斬首數百級。同善等又進至金山、爲賊所敗、高麗乘勝而進、仁貴橫擊之、賊衆大敗、斬首五萬餘級。遂拔其南蘇・木底・蒼巖等三城、始與男生相會。高宗手勅勞之曰、「金山大陣、兇黨實繁、卿身先士卒、奮不顧命、左衝右擊、所向無前、諸軍賈勇、致斯剋捷、宜善建功業、全此令名也」。仁貴乘勝、領二千人、進攻扶餘城、諸將咸言兵少、仁貴曰、「在主將善用耳、不在多也」、遂先鋒而行、賊衆來拒、逆擊大破之、殺獲萬餘人、遂拔扶餘城。扶餘川四十餘城、乘風震懼、一時送款。仁貴便並海略地、與李勣大會軍于平壤城。

舊唐書八三
薛仁貴傳

博士は薛仁貴に咸鏡道方面を迂回させたので、かゝる大迂回行動に主將自ら參加する筈はないから、扶餘城の攻陷は専ら薛仁貴一軍の單獨行動だと主張してゐられるが、記錄の示す限り、扶餘城の攻陷には必ず皆主將李勣が參加してゐるの

である。その事は前に掲げた通鑑の本文にも明白であつて、先づ「李勣等拔高麗扶餘城」とあり、殊に末に扶餘城の救援に來た泉男建の大軍と李勣が薛賀水上に合戦したことも述べてあるが、同じ事を傳へた冊府元龜^{卷九}にも「李勣及薛仁貴、進拔高麗之扶餘城、云々」とあり、唐會要^{卷九}には「李勣攻拔扶餘城」と見え、新唐書^{卷三}の高麗傳には「三年二月、勣率仁貴、拔扶餘城、它城三十、皆納款」とも見えてゐる。博士はこれらを悉く誤傳だとしてゐられるが、さうさう多くの史料が一致して悉く誤る筈はない。否、博士の依據せられる薛仁貴傳そのものにも、明かに仁貴は「遂先鋒而行」とあり、それは冊府元龜にも資治通鑑にも同様に見えて、その先鋒の後には李勣の本軍が続いたのである。少くともその薛賀水の合戦のことは、舊唐書^{卷五}の高宗本紀總章元年二月戊午の條にも、「遼東道破薛賀水五萬人陣、斬首五千餘級、獲生口三萬餘人、器械牛馬不可勝計」とあつて、かゝる大決戦は決して二三千人の薛仁貴の一軍の能くするところではない。やはり通鑑や唐書高麗傳等に明記する通り、李勣の大軍

の自らやつたことなのである。しかも總帥李勣の行つたところは到底咸興などの邊陲ではあり得ない。

池内博士の研究には特に「國內城の略取」といふ一章があつて、唐軍の國內城略取の顛末を考へ、南蘇・木底・蒼巖諸城を陥れた薛仁貴等の軍はうち揃つて國內城に入城した。扶餘城の攻陥はその後に敘してあるから、國內城以遠の所であると考へて、さてこそ扶餘城咸興説をも案出されたのであるが、史料を細檢すると、唐軍は別に國內城などは略取してゐない。前述の通り國內城方面は唐軍の味方の泉男生の勢力範圍である。新唐書^{卷一〇}の泉男生傳によると、男生の唐に通ずるや、「舉哥勿・南蘇・蒼巖等以降」とあり、近頃洛陽で發見された泉男生墓誌銘には、「公率國內等六城十餘萬戶、書籍輦門、又有木底等三城、希風共款、云々」とも見えてゐる。これはこれら諸城がもと泉男生の勢力範圍にあつたことを明示するものである。然るに高句麗の軍は忽ち遼東の平野を横斷して、唐と男生との連絡を絶ち、勢に乗じて新城から南蘇・木底・蒼巖三城まで侵奪してしまつた。だから唐軍は先

づ手初めにその門口の新城を取り、敵を攘つて右の三城を恢復した。さうすると、それより先きはなほ泉男生の保有するところであつたから、そこで唐軍は泉男生の軍と相會するところを得たのである。「與泉男生相會」とか、「始與男生相會」とか見えるのは、無論その意味であつて、それは前掲の通鑑や薛仁貴傳その他にも明々白々である。南蘇等三城が俱に蘇子河流域以北にあつて、その先きの倭家江流域や鴨綠江方面の諸城の名の出て來ないのは、唐軍が右三城を恢復したゞけで事足り、その先方へは行く必要を見なかつたからである。

唐軍が如何に悠長でも、自分の勢力範圍を更めて略取して、そこに蟠據する必要は毛頭無いではないか。薛仁貴傳には不幸にしてそこから引返したことが明記してないが、同功一體の契苾何力傳には「時高麗兵十五萬屯遼水、引靺鞨數萬衆、據南蘇城、何力奮擊破之、斬首萬級、乘勝進拔八城、引兵還、與勤會合」といふやうに見えてゐる。薛仁貴はこの軍に加はらなかつたか、それでなければ、やはり斯くの如くにして引返して扶餘城を抜いたものに相違ない。倭家江流域までさへ

行かなかつたものが、どうしてその下流で扶餘城を抜き、もしくは遠く咸興の扶餘城まで進撃出來たであらうか。

八

それでは問題の金山や扶餘城は果して何處に求むべきであらうか。それはやはり故松井學士が考定せられた所の方が寧ろ事實に近いやうである。松井氏は常識によつて新城附近に金山といふ地名を求めて、遼東志に開原管内の山として見えた金山をこれであらうとし、扶餘城は例の農安の扶餘城とせられた。扶餘城のことは姑く措く。金山縣のは遼金時代にも現はれ、元の末には北元の太尉納哈出の根據地として一時有名であつた。今遼東志の附圖を百萬分一東亞輿地圖に比較して見ると、東遼河の北岸のこれと覺しきあたりに東哈拉把山といふ山があり、その山の北方で、新集廠の東方十數支里の所に、農安街道に當つて金山堡といふ村落がある。新集廠は即ち信州城で、遼金時代の信州武昌縣の遺址であるから、この金山堡のあたりが恐らく有名な金山であらう。しかし問

題の高句麗時代の金山は實はこゝではなく、或はもう少し南方の金山であつたかも知れぬ。同じ地圖によると、新集廠の南方約二百支里、八面城の南方、大窪と寶力屯との間にまた金山堡といふ所があり、その東南數十支里、昌圖の北東、今の滿鐵の滿井驛の北西にも亦また同じく金山堡といふ所がある。所要の金山は恐らくこの邊であらう。といふわけは、扶餘城が必ずその中間の四面城だと思はれるからである。

さて話は前に戻る。渤海の扶餘府が遼代の黃龍府になり遼代の黃龍府が金代の隆安府であつて、それが即ち今の農安の地に當ることはほゞ疑ない。しかしなほ仔細に考へて見ると、遼の黃龍府には二つあり、最初の黃龍府は渤海の扶餘府の地について設けられたことは確かであるが、後それは廢止せられて通州となり、新たなる黃龍府は聖宗の時に別に東北に移して再建せられたのである。して見れば、今の農安の地が金の隆安府で、遼の復置の黃龍府であることは間違ないが、遼の初設の黃龍府即ち渤海の扶餘府の址は今の農安よりは更に西南にあつたものでなければならぬ。これは松井氏も氣づ

いて居られたが、その通州の地が判然せぬまゝに、いづれ西南程近い所であらうと推測せられ、扶餘府は即ち農安附近と概言せられた。そこで餘の學者は大體之に盲從して怪しまなかつたのである。

然るに之を再検討して新見解を出したのは、滿洲の碩學金毓紱氏であつて、氏は故服部博士の記念論文集に「渤海扶餘府考」なる一篇を寄せ、渤海の扶餘府は正しく遼代の通州であつて、遼の通州は必ず今の昌圖の北、八面城の南の四面城に相違ないから、渤海の扶餘府は即ちこゝにあつたのであると主張された。⁽¹⁹⁾ 自分も久しく扶餘府の址を尋ねて、結局要領を得なかつたが、金氏の論證を見ると、恐らくそれに相違はあるまい。但し氏は、遼の太祖は扶餘府を陥れて後僅々七日にして國都忽汗城下に抵つたが、今の農安から東京城(即ち忽汗城)までも七日行程には少し無理なのに、四面城から東京城までではなほ一層遠いから、渤海の最後の都忽汗城は實は牡丹江畔の東京城ではなくして、ものと中京顯德府の址で、即ち輝發河畔の蘇密城ではなかつたらうか、といふやうなことを附

言された。しかしこの附言は無用である。忽汗城が中京顯德府でないことは勿論、中京顯德府も恐らく輝發河畔に無かつたのであるし、それよりも、道程の上から見ても、農安から東京城へ行くよりは、四面城から東京城へ行くことの方が寧ろ順路である。これは殆ど遼東志^{九卷}に所謂開原東陸路を納丹府東北陸路に連ねた孔道そのまゝである。扶餘府は渤海の契丹道とされてゐたが、從來の如く農安と考へては、少し西北に斗出し過ぎて變であつたが、之を四面城と考へれば、正に契丹に通ずる直路に當るであらう。

たゞ歴史を案するに、輝發河の流域は渤海の長嶺府の管域に相違なく、その府治は恐らく今の北山城子の附近かと推定される。こゝは遼代以後に回跋部として現はれた地方である。然るに遼の太祖の渤海を攻むるや、扶餘府を陥れると、直に忽汗城に迫つた。扶餘府を四面城とすれば、その進攻路は當然輝發河に沿ふものでなければならぬのに、その時何等の抵抗を見ず、却つて後になつて長嶺府の背叛に遼軍が手を焼いた始末が遼史に見えるのが、一寸合點が行かない事實

のやうでもあるが、しかしこれも長嶺府は最初一時懾服してゐたのが、後に奮起して反抗したものと見れば大して差支へないであらう。

とも角も、渤海の扶餘府は農安の方面ではなくて、それより西南數百里の今の四面城だつたのである。さうして思ふに、それこそ問題の高句麗の扶餘城だつたものに相違ない。その證據は唐書の中に見えてゐる。唐の統一が成つて、その壓力の漸く高句麗に加はるや、高句麗の榮留王高建武は國の西邊に長城を築いて之に備へたといふ。その事は冊府元龜^{九卷}にも見えてゐるが、舊唐書^{卷一九}高麗傳には

建武懼伐其國、乃築長城、東北自扶餘城、西南至海千有餘里。

とあり、新唐書^{卷二}高麗傳には

建武懼、乃築長城千里、東北首扶餘、西南屬之海。

とあるものが即ち是れである。これは明かに今の昌圖の西北から遼河に沿つて長城を築き、之を遼東灣頭に屬したもので、その海岸から千里といふ扶餘城は、勿論農安でもなければ

ば、況して倭家江畔や咸興などであり得よう筈がない。

金山や扶餘城がかやうな方面にあつたればこそ、撫順の新
城を陥れた唐軍は引返してこの地方を平定したのであらう。

この地方は高句麗西北面の要地であつて、後の遼金時代の史料にも頻見するやうに、無數の城寨の列置するところであつたから、之を鎮定せずしては唐軍は背後を安くして南下することを得なかつたのである。扶餘城を陥るゝや、「扶餘川中四十餘城、皆望風請服」とか、「扶餘川四十餘城、乘風震懼、一時送款」とかあるのは即ちこの形勢を述べたのであつて、扶餘川とは上遼河流域の平野を曰つたのである。新唐書の薛仁貴傳に之を形容して「威震遼海」とあるのも勿論當然で、池内博士が之を「扶餘城を遼東の一城と誤認した新唐書の編者の杜撰なる蛇足に過ぎぬ」といはれたのは固より當らない。

扶餘城はかくの如き要害であつたから、之を陥れられることは、遼東に於ける高句麗勢力の覆滅を意味した。だから高句麗は全力を傾けてこの城の救援を計つた。その救援軍がまた唐軍に邀へ撃たれて敗績したのが、即ち薛賀水の合戦であつ

る。薛賀水の會戰のことは上に述べた資治通鑑や舊唐書本紀の外、新唐書の高麗傳にも見えて、左の如くある。

男建以兵五萬襲扶餘、勦破之薩賀水上、斬首五千級、俘口三萬、器械牛馬稱之。

薩賀水は薛賀水の別譯である。池内博士はこの薛賀水をも咸興盆地の城川江に比定せられたが、これこそ四面城附近の遼河の支流でなければならぬ。

さて前にも言つたやうに、金山・扶餘城・薛賀水の三大戦はこの征戰の殆どクライマックスであつて、この三戦を経た後、少くとも遼東の形勢は唐軍の優勢に定まつたので、總帥李勣は當然大軍を率ゐて連山關道を進み、鴨綠江畔に薄つて、大行城を抜いたが、他の諸將もそれ〴〵道を分つて敵地を狗へながら、鴨綠柵の前に一旦集結した。池内博士のいはるゝ如く、大行城は即ち今の九連城で、鴨綠柵は恐らく今の義州の附近であらう。冊府元龜卷八十六に「勣既破大行城、諸軍盡會」とあり、資治通鑑卷二に「勣既克大行城、諸軍出它道者、皆與勣會、進至鴨綠柵」とあるのは、即ちこの事であつ

て、薛仁貴軍と雖も勿論その例外ではなかつた。兩唐書の薛仁貴傳に扶餘城に克つや、「因旁海略地、與李勣軍合」といふやうにあるのは、固より遼東の海に旁うて地を海・蓋・金・復方面に略し、西方より來つて李勣の軍に加はつたのをいつたのであつて、決して咸鏡道方面などを攻掠したことではない。遼東を経略する兵が連山關の本道と同時に、沿海地方をも平定する必要のあつたことはいふまでもないことで、日清・日露の戦役でもさうであつたが、高麗末の池龍壽の用兵を見ても能く解る。⁽²²⁾鴨綠江畔に集結した唐軍は江を渡つて敵都平壤に迫り、やがて之を陥れたのである。舊唐書の薛仁貴傳に「仁貴便並海略地、與李勣大會軍于平壤城」といつたのはその事を概言したのであつて、別に仁貴が他道より來つて平壤で始めて合隊したことを意味するものではない。

九

かう考へて來ると、渤海の扶餘府や高句麗の扶餘城が今の四面城方面なことは略と認めてよいやうである。して見る

と、近世のこの方面の要衝は開原であるが、上代には開原より扶餘即ち四面城の方が重かつたものと見える。これは思ふに、滿洲の深林地帯が次第に東方に退く結果であつて、昔はもつと森林地帯が西方まで張り出してゐたのである。それはこの方面の地形を仔細に觀察すれば自ら覺られることで、東方の山地に等しい丘陵がこの邊まで續々連つてゐて、今こそ禿山になつてゐるが、昔は相當森林に蔽はれてゐたことを思はせるからである。近年鐵道が敷かれてから少々變つたが、その前清代の普通の交通路によると、開原からは東北して伊通を経て吉林に出で、河に沿つて北行するのが常道であつた。だからフランスの碩學シャヴァンヌ氏は所謂宋の許元宗の行程録を考へた時に、ほどこの道に依らせたとであるが、⁽²³⁾今我々の持つ歴史地理上の知識によれば、中世以前にはこの邊の交通路は開原より寧ろ西北して昌圖（宿州）、八面城（韓州）に出で、新集廠（信州）より農安の方に向つたのであつて、今の滿鐵の沿線よりは遙に西方を通つてゐた。されば、近世は開原が中心であつても、上代には寧ろ四面城方面が中

心だつた事情が十分推察される。だから近世女直の強部は開原南北關の哈達や葉赫であつたが、往昔の強部扶餘は昌圖の方面にゐたのであらう。

けれども渤海の扶餘府や高句麗の扶餘城はそこであつたとして、漢魏時代の夫餘國もやはりこの邊にゐたのであらうか。魏志の東夷傳夫餘の條には、その住域を説いて左の如くある。

夫餘在長城之北、去玄菟千里、南與高句麗、東與挹婁、西與鮮卑接、北有弱水、方可二千里。戸八萬、其民土着、有宮室・倉庫・牢獄。多山陵廣澤、於東夷之域最平敞。土地宜五穀、不生五果、……

これで見ると、割合に開けた善地ではあつたが、漢の邊境からはそれ程近くなかつたやうである。さうして同じく高句麗傳には「東與沃沮、北與夫餘接」とのみあつて、高句麗は挹婁とは接觸せず、之に反して東沃沮は「北與挹婁夫餘接」とあり、夫餘と直接隣接してゐる。これらから考へれば、當時の夫餘は高句麗の北境を掩つて東方沃沮にまで達してゐたのであつて、少くともその方二千里の範圍は輝發河の流域以東

にまで及んでゐたものと考へねばならぬ。かやうな大國の中心が果して昌圖の北方などに偏してゐてよいものであらうか。池内博士は夫餘は金の特産地であるから、金源の發祥地阿城附近でなければならぬといはれたが、昌圖の北方には無暗に金山といふ地名があつて、それは必ず産金と關係あると思はれるから、その點は却つて都合がよい。しかし「在長城之北、去玄菟千里」といふにしては、里數はあてにならないにしても、餘りに近過ぎる。「北有弱水」といふ國の北境の弱水は必ず松花江のことを指したものに相違ないが、それも四面城を中心にしては少々變である。それよりも「於東夷之域最平敞」といふ形容も、四面城にしては餘り當らない。最も困難なことは、魏書^{卷一}の高句麗傳によると、後魏の正始中(504—7 A. D.)魏に朝した高句麗の使節の言によれば、「今夫餘爲勿吉所逐」とあり、そのために夫餘は最後の止めを刺されたやうであるが、今の四面城では北滿の勿吉に逐はれる筈はないのである。

それでは、これはどう考へたらよいか。資治通鑑^{卷九}によ

れば、東晋の穆帝の永和二年（346 A. D.）正月の條に、夫餘が燕の慕容皝のために壊滅的打撃を受けたことを述べて、

初夫餘居于鹿山、爲百濟所侵、部落衰散、西徙近燕、而不設備。燕王皝遣世子儁、帥慕容軍・慕容恪・慕容根三將軍萬七千騎、襲夫餘、僞居中指授、軍事皆以任恪。遂拔夫餘、虜其王玄及部落五萬餘口而還。皝以玄爲鎮軍將軍、妻以女。

と見えてゐる。思ふにこれが參考になるのであらう。鹿山はどこだか解らないが、恐らく從來の夫餘の本據であつたのであらう。然るに夫餘の勢の衰ふるや、夫餘は敵を避けて、「西徙近燕」といふ。四面城は滿洲民族の住地としては最も西で、これより西に避けやうはない筈であるから、その西徙して燕に近かつた最後の根據地が即ち四面城の扶餘城なのであらう。さうとすれば、その前にはもつと東方にゐたのであつて、そこが鹿山の本據である。⁽⁹⁵⁾

鹿山の本據が漢魏時代の夫餘の中心地だとして、それはやはり右の夫餘傳の記述に合致するところでないならならぬ。

から、四面城の東方でもよい加減のところには求められない。やはりほどその條件に適つたものとしては、伊通河畔の要衝農安長春の附近にでも之を求める外はない。かくして少少持つて廻つた結果になつたが、漢魏時代の夫餘は恐らく農安長春の方面で、魏將王頎の招撫したところもやはりそこであらう。それが後に西南に徙つたので、麗末・渤海時代の扶餘は上遼河東岸の四面城にあり、遼の中葉になつて、また徙されて農安の黃龍府となつたものと見るべきであらう。

考へて見るに、高句麗は支那の東方に興つた最古にして最大に、且つ運祚の最も長い大國であつた。この後、金や清は起つたけれども、忽ちにして支那に打ち入つてしまつた。滿鮮の地に止まつたものとしては、高句麗ほどの雄國はない。

新唐書^{卷二}の渤海傳によると、渤海の王子大門藝の言として、「昔高麗盛時、士三十萬、……今我衆比高麗三之一」といつてゐる。高句麗の起つたのは西洋紀元の前後であつて、その亡んだのは七世紀の半過ぎである。高句麗はかやうな大國であつて、運祚も最も長かつたから、その歴史は複雑を極

め、今日でも明かでないところが多い。本篇に取扱つたのは、偶々之に對する漢民族國家の殆ど最初の征戰と最後の征戰とである。それにしても、専門家の間に右の如き大誤解を免れないのである。もしこの小篇が幾分なりとも、この高句麗史の解明に役立つならば、著者の欣幸とするところである。

- (1) 池内博士「曹魏の東方経略」滿鮮地理歴史研究報告拾貳、一七八頁。
- (2) 同上二二頁。
- (3) 同上二四頁。
- (4) 樂浪郡治が平壤なことはほと異論はあるまい。當時の玄菟郡治が今の撫順にあつたことは池内博士「高句麗討滅の役に於ける唐軍の行動」(滿鮮報告拾六、一二四—八頁)、參照。帶方郡治は通常沙里院の南の唐土城とされてゐるが、池内博士はやはり漢水の流域に比定された。それがよいであらう。(同上三八—四三頁)。
- (5) 魏志韓傳には「臣智激韓忿、攻帶方郡崎離營、時太守弓遵樂浪太守劉茂與兵伐之、遵戰死」とあり、倭人傳には「八年太守王頤到官」とある。
- (6) 「曹魏の東方経略」二二—二五頁。
- (7) 池内博士「前漢昭帝の四郡廢合と後漢書の記事」加藤博士還曆記念東洋史集説六九頁。
- (8) 滿洲歷史地理第貳卷、三二—四二頁。
- (9) 池内博士「夫餘考」滿鮮報告拾三、七六—八四頁。
- (10) 史淵三四輯一一〇四頁(昭和二十一年一月刊)。

- (11) 池内博士「勿吉考」滿鮮報告拾五、一五—一六頁。
- (12) 三國史記卷三七地理志所引。
- (13) 池内博士「高句麗討滅の役に於ける唐軍の行動」滿鮮報告拾六、七九—二五七頁。
- (14) 同上二二—四頁參照。
- (15) 滿洲歷史地理第壹卷、四〇—二二頁。
- (16) 池内博士「高句麗討滅の役云々」滿鮮報告拾六、一二八—一三一、一五九頁及び高橋匡四郎氏「蘇子河流域に於ける高句麗と後女眞の遺跡」建國大學研究院研究報第二輯四六一—五四頁參照。
- (17) 津田左右吉博士「勿吉考」滿鮮報告壹、三〇—三七頁。
- (18) 池内博士「高句麗討滅の役云々」滿鮮報告拾六、一七四—一九九頁。
- (19) 金鏤波氏「渤海扶餘府考」服部先生古稀祝賀記念論文集三五五—三六七頁。
- (20) 池内博士「高句麗討滅の役云々」滿鮮報告拾六、一九四頁。なほ三國史記の地理志にも扶餘城は鴨渌水北と傳へてゐる。
- (21) 同上、一六六、一七二頁。
- (22) 高麗史卷一四池龍壽傳。
- (23) Ed. Cheyenne, Relation de Hiu K'ang-Tsong, Journal Asiatique, IX, II, pp. 361—439.
- (24) 池内博士「夫餘考」滿鮮報告拾三、八三—四四頁。
- (25) 鹿山とは恐らく鹿のゐる山といふ意味であらうが、唐書渤海傳によれば、渤海の名産として、太白山之菟、南海之昆布、柵城之玃など、共に、扶餘之鹿といふものがある。しかし愚考によれば、渤海の扶餘府は鹿山とは違ふことになるわけである。